TOYO EIWA JOGAKUIN
PUBLIC RELATIONS REPORT
No.65
11.09.07

FÛ EN
楓園

CONTENTS

1 — 特集　東日本大震災と東洋英和
5 — この人に聞く　タンゲナ鈴木由香里
6 — 東洋英和幼稚園 NEWS・かえで幼稚園 NEWS
7 — 小学部 NEWS
8 — 中高部 NEWS
9 — 大学　大学院 NEWS
11 — 行事報告　3月～5月
12 — お別れの言葉・史料室レター
13 — 聖書の言葉・英和探訪
14 — 後援会 NEWS
15 — 英和の植物通信・お知らせ

■小学部の避難訓練
年に7回避難訓練を行っています。今年度、第2回目の5月の訓練は食堂からの避難でした。

東洋英和女学院

東日本大震災と東洋英和

このたびの東日本大震災で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。
今回の「楓園」では震災をめぐる学院からのメッセージや諸活動をお伝えいたします。

地に住む者よ、恐怖と穴と罠がお前に臨む。
恐怖の知らせを逃れた者は、穴に落ち込み
穴から這い上がった者は、罠に捕らえられる。
天の水門は開かれ、地の基（もとい）は震え動く。
地は裂け、甚だしく裂け
地は砕け、甚だしく砕け
地は揺れ、甚だしく揺れる。
地は、酔いどれのようによろめき
見張り小屋のようにゆらゆらと動かされる。
地の罪は、地の上に重く
倒れて、二度と起き上がることはない。

イザヤ書 二四章一七〜二〇節（全学院新年度礼拝の聖句より）

震災を乗り越え、今年を新しい出発の年に

理事長・院長　池田　守男

今から一〇年前の二〇〇一年、二十一世紀の幕開けとなるこの年を私は大きな期待をもって迎えました。戦後の高度成長期を経て、日本は経済的には豊かになりましたが、どこか心の部分で大切なものを喪失してしまったように感じていました。新しい世紀を迎え、モノではなく、ココロ中心、すなわち物質文明から精神文明を重視する時代へと転換する必要があるのではないか、そう思っていました。しかし残念ながらこの一〇年を振り返ると必ずしもそうはなっていません。二〇一一年こそ新しい時代の幕開けとしたい、そう願っていました。

そこに三月十一日の東日本大震災が起きました。原子力発電所の事故も含め、この未曽有の事態を経験し、社会構造・経済・産業の在り方、また人としての生き方までも見直す必要にせまられています。言い換えれば、これからの時代を生きていく方向付け、指針を与えられたように思います。今まで「私」、すなわち個人の尊厳を重視してきましたが、これからは「公＝パブリック」、すなわち公共・公益を中心に据えて考えていく必要があるのではないでしょうか。

私は学院での理事長・院長の役割のほかに、内閣府の公益認定等委員会の委員長を仰せつかっております。民間の活力、とくに非営利法人による公益活動を社会に定着させていくことが私の使命だと考えています。今回の震災に際し、日本全国のみならず世界中から支援の手が差し伸べられました。震災は不幸極まりないことではありますが、この現実に対処しようと大きな公益の輪が広がりつつあると感じています。人と人が触れ合い、手を取り合い、助け合う、そのような人間の温かみが感じられる社会、すなわち常に私たちの心にある「隣人愛の精神」に溢れた社会の到来を願っています。

学院においては、この機会に建学以来の精神を思い起こし、また実践することが重要です。学院標語の「敬神奉仕」の「敬神」は神を敬い、神のもとで謙虚に生きることです。「奉仕」とは他者の苦しみを自分の苦しみとし、他者の痛みを自らの痛みとすることから、他者に寄り添い必要とされるものを与えることです。聖書に「喜ぶ人とともに喜び、泣く人とともに泣く」、「与ふるは受くるより幸ひなり」とあります。

私たちは被災された方々の立場に立って、何ができるか、又これからの時代に向かって何を為すべきかを考え実践する必要があります。仮に、「与える」ことに喜びを感じないとしたら、それは支援を義務ととらえているからです。私は本来「与える」ことは人間の権利だと考えております。すなわち「与える喜び」は、人としての権利を行使する喜びなのです。この機会に、人間が本来有する「与える喜び」という権利の行使を、声を大にして求めていこうではありませんか。

私たちは東日本大震災という大変つらい経験をしましたが、これを機会に日本は新しい転換期に入ったのです。これからを担う若者たちに大いに期待しています。二〇一一年を新しい出発の年として参りましょう。

学院の防災対応について

法人事務局

今回の大地震当日には、学院各部に多くの生徒や教職員が宿泊することとなりました。各部では、かねてより用意してある備蓄品等を活用し翌日まで大きな混乱もなく、過ごすことが出来ました。

防災対応は大学・中高部・小学部・両幼稚園の各部がそれぞれの立場で検討し、日頃から避難訓練などの各種訓練を行ったり、食糧や水のほかヘルメット・毛布・簡易トイレ・ラジオなどの防災用品を確保し備蓄するなど整備しています。それと同時に、学院本部としても全体観をもってさまざまな施策に取り組んでいます。

建物本体については、七年前に耐震補強工事を完了した幼稚園を除く全ての建物が一九八一年以降の建築であり、新耐震基準で建てられたものです。そのため、今回の地震でも大学・中高部で構造に影響のない一部の壁に軽微なひび割れが入った程度で、安全面では全く問題はありませんでした。

また、書棚やロッカー、テレビモニターなどの設備や什器、絵画などについても既に耐震固定を一応終えており、今回も被害はありませんでしたが、これについては改めて再点検することを検討しています。

なお、学院全体の危機管理を考える場として、「危機管理委員会」が組成されており、法人事務局総務企画部を中心とする法人本部と各部の代表者が議論をしています。震災後の防災対応に関する議

震災・技術・信仰

学長・副院長　村上　陽一郎

　今回の震災で、現代技術の枠を集めたはずの原子力発電所が、致命的なダメージを被った。ある意味では、自然に対する技術の敗北である、原子力発電推進派の人々が安全を詐称してきた、という非難が大きい。しかし、技術の世界で「絶対安全」ということはあり得ないという点は、誰もが承知していることである。どれだけ安全が保証できるか、を通常は、確率で表現する。例えば工学の幾つかの領域には、〈six nines〉という表現がある。「九が六つ」というのは〈99.9999〉パーセント安全だが、それでも0.0001パーセントは、問題が起こる余地が残される、という意味である。その可能性をどのように推察し、どのようにして、その数値をさらに小さくさせるか、技術は、こうした形で進歩を遂げてきた。

　問題は、リスクが起こり得る可能性をどこまで予見できるか、なのだが、残念ながら、今回は津波に関する予見において、極めて不備であった、という点が露呈された。払わなければならない犠牲は大きすぎるが、それでも私たちは、今回の経験から、不備を修正することで応えなければならない。

　リスク管理の主眼点は、通常、リスクが起こる確率と、起こってしまった時の損害の大きさとの積を如何に小さくするか、というところにある。しかし、今回の原子力発電所の事故が示すように、一旦問題が起こってしまったときの、犠牲の大きさを考えると、このような領域では、単にリスクの生起確率の予見性だけで、議論してよいのか、という問題が浮上する。

　技術を離れれば、私たちの常識の世界では、「転ばぬ先の杖」という原理が働くことがある。とても起こることは予見できないが、つまりほとんど杞憂に過ぎないかもしれないが、それでも、万一（「万一」を文字通りにとると、99.99パーセントになるが）起こったときのことを考えて、対策を立てることを言う。

　最近この原理は国際的に「事前警戒原理」〈precautionary principle〉と呼ばれて、環境問題などで、しきりに議論されるようになっている。原子力発電のような技術の場合には、こうした原理の発動も、考慮に入れなければならないことになろう。ただ、仮にドイツのように、出来るだけ早い機会に全廃するという決断をしたとしても、問題がないわけではない。特にドイツの場合は、EU圏で、電力の相互融通が行われていることを考えると、自分だけは全廃しても、実はフランスやベルギーの原子力発電所で生産された電力を、利用している、という可能性も、充分あるのである。もう一つの問題は、廃炉や廃棄物の処理には、これから長い年月が必要で、当分は、原子力技術を充分にサポートする体制を造らないと、極めて危険な事態を招くことが予想される。アメリカやロシアでは、原子力を利用した軍事の艦船が必然的に残るので、技術の開発や人材の確保が容易であるが、日本のような平和利用のみの場合、むしろ「廃止」の決断には、厄介な課題が残るのである。

　さて、今回の災害では犠牲者の数は二万人を超えるとされる。かつて経験した広島・長崎や東京大空襲も含めて、戦争や今回のような災害で多くの方が亡くなる惨状を目にして、イエスはどこにおられるのだろう、という疑念は、信仰の立場からも、決して意味のないものではない。旧約聖書におけるヨブの受けた苦しみも、その前例かもしれない。それを単なる試練と考えるには余りに深刻でもある。信仰の立場から何が言えるのだろうか。

　私にとっても、とてもまともには答えられない問いである。もっとも大量の死と、単独の死を比べて論じることも、必ずしも正当ではないかもしれないが、一人一人が受けた死や苦しみは、その一つ一つの現場に、イエスが倶にいまして、それを共有して下さっている、とでも考えなければ、説明がつかないようにも思う。まさしくイエスの十字架上の死は、その先触れ、あるいは象徴だったのであろうか。

論は今のところ校地ごとに行っていますが、六本木校地では震災後何回かの会議を経て、①防災用品の調達・備蓄、②非常時の連絡手段、などについて意見交換をし、①については各部とも原則として三日分の防災用品を備蓄することを決め、②については個々の生徒・保護者がID番号やパスワードを使う緊急連絡用の学院ホームページを構築することなどを検討しています。また、地域への貢献・協力の観点から、港区や各種コミュニティー主催の会議に参加しています。一方、大学では横浜市から広域避難所に指定されていることもあり、横浜市や地元の霧が丘連合自治会とも調整を図りながら危機管理体制について検討を深めています。

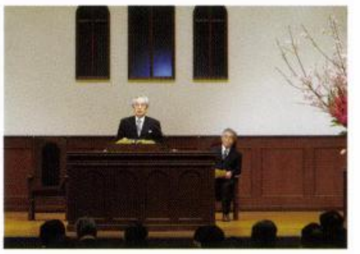
　最後に、これは学院の防災対応ではありませんが、今回の震災で被災された方々への支援として各部がそれぞれの立場で活動を行っているほか、学院として義援金口座を開設しています。また、大学では罹災家族のいる学生や来年度受験生を対象とした支援を行っています。なお、春以降、園児・児童・生徒・学生・教職員などの理解と協力の下、電灯の間引き・電気給湯器などの使用制限・エレベーターの使用制限・エアコンの温度管理・パソコンの節電・クールビズの遂行などを行い、節電に努めています。

中高部の避難訓練

二〇一一年四月八日　東洋英和女学院全学院新年度礼拝説教より

「神に迫られた改革」

聖学院名誉理事長
聖学院大学大学院長
東洋英和楓の会顧問　大木　英夫



　東日本大震災。この巨大な崩壊は、それまで数々の経験がありながら、戦後の国づくりの失敗を暴露しているのではないか。八八年前の関東大震災での東京壊滅の後、時の天皇の「国民精神強化振興の詔書」が発布された。大正リベラリズムの軽佻浮薄を排し質実剛健・忠孝義勇など、明治天皇の教育勅語の倫理道徳に立ち返っての「国家再建」の企てを励ますものであった。私はここで、そのような時代精神の中で生を受けながら、成長していった一人の青年のことを思い出す。臼淵磐。海軍兵学校へ抜群の成績で入ったエリート。敗戦の年、（三月十日の東京下町を包んだ地獄の業火の光景は今も私の眼底に焼き付いたままだが）臼淵はその四月に二一歳で大尉に昇進して不沈艦「大和」に乗り込んでいる。戦局を逆転すべく沖縄を目指したが、群がる敵機の集中攻撃でその不沈艦は炎上し、真っ逆さまに海底に沈没してしまった。しかしそれに先立つ戦友達との真剣な艦上討論で、臼淵は語っていた。「日本は進歩ということを軽んじすぎた。敗れて目覚める。それ以外にどうして日本が救われるか。俺たちはその先導になるのだ。」

大木 英夫先生

　そして間もなく二発の原爆による崩壊。詔勅に導かれて「国づくり」を目指した「大和の国」自体が沈没したのだ。戦後の日本の「国づくり」、それは、東京オリンピックや大阪万博に象徴される、戦争の悲惨さを早々に忘却して経済復興と成長に酔いしれる態のものであった。そうした中、小松左京の『日本沈没』が出版されたが、もはやフィクションなどとは言えぬ。まさにあの預言者イザヤの言葉「地の基震い動く」（二四章一八節）が現代の経験となっている。

　あの大空襲の記憶が残る東京下町には世界一高いスカイツリーが完成する。それを支えるものは五重塔建築の設計方式「心柱」とのこと。では「人生」における、過去から未来へ、死をも越えて生きて行く「心柱」とは何か。ヘーゲルの「有・無・成」の弁証法的概念はキリストの「生・死・復活」を基礎としていると解釈される。自転車に例えるなら、その前進は、スタンドを外して、まさに倒れんとする否定的力をペダルを踏むことで前へ進むという積極的力（成る）へと転換する時にこそ実現する。このような意味と仕方で、生と死と復活のキリストが私達の人生の「心柱」として同伴し歴史を導かれる。

　今、日本は真の「改革」を神に迫られている。それは臼淵大尉の自覚にあった、否定的なものを媒介とし前進して立つこと。生まれ変わって「新しい人」になることである。それは「神のかたち」（創世記）に似せて造られた人間のみが持つ可能性である。その意味で、日本も今、無残に打倒されたまま終わるのではなく「新しい日本」に生まれ変わり立ち上がる可能性の中にあるのだ。それは取りも直さず、キリストという心柱をもって生きる人類の可能性である。

　古い革袋に新しい酒を入れようとした明治以来の和魂洋才の精神は、言わばその革袋を、関東大震災と東日本大震災によって惨憺たる仕方で破られてしまった。日本は今度こそ新しい国づくりができるだろうか。日本への同情と支援の中で、世界中の人々が、世界にとっても未来の希望となる日本の「新しい復興」を、期待し見つめている。いや神が見ておられるのだ。人生も社会も、現代のグローバリゼーションも、その心柱はキリストである。日本が、世界一のスカイツリーよりも、世界に奉仕する世界一「新しい国」として蘇ること。この大きな課題に、キリスト教教育は今こそ取り組まなければならないのである。

（先生の説教全文は学院ホームページトピックスに掲載されています）

東日本大震災被災地への募金のお願い

　学院では被災地の方々への義援金の募金活動を実施中です。個人の方々をはじめ、「中高部生徒会」「東洋英和幼稚園母の会（いちょうの木献金セールの収益より）」「小学部母の会」「中高部母の会」「同窓生有志」「母の会 OG 」「英和茶会基金」「マルタとマリアの会」ほか、多くの皆様にご協力をいただき、7月5日時点で、総額 658 万円のご寄付をいただきました。心より感謝申し上げます。

　皆様からお寄せいただいた義援金は、日本赤十字社、キリスト教関係団体などを通じ、被災者支援および震災で保護者を失った子ども達への支援、復興支援に役立てていただきます。

■受付方法　（1）銀行振込　口座：三菱東京 UFJ 銀行　六本木支店　普通預金　No.0124495
名義：学校法人東洋英和女学院東日本大震災義援金
ガク）トウヨウエイワジョガクインヒガシニホンダイシンサイギエンキン
（2）募金箱　六本木校地　本部・大学院棟１階　受付に設置

【お問い合わせ先】　法人事務局　財務部経理課　TEL　03（3583）3853（詳細は学院ホームページトピックスをご覧ください）

震災をめぐる学院関係者の諸活動

未曽有の大災害に対して、学院関係者がさまざまな活動を展開しました。
そのいくつかをご紹介いたします。

死者を悼み、悲しみを癒す音楽 —死生学研究所—

2011 年 6 月 25 日、死生学研究所連続講座第 3 回として大震災犠牲者の追悼コンサート「オルガンと合唱による<慰めの音楽>」が新マーガレット・クレイグ記念講堂で開催されました。東洋英和女学院中高部合唱部（武田ゆり先生指揮）によるフォーレのレクイエム、バッハのカンタータほか、河野和雄先生のオルガンによる映像つきの「スヴィニーのための組曲」など多くの曲が演奏され、80 名ほどの聴衆は大いに慰められました。実家が被災したという方も「心が洗われた」という感想を寄せられました。心のこもった音楽は悲しみを癒し、死者に安らぎをもたらすと思えました。

メサイアをうたう会 —チャリティーコンサート開催—

撮影：スタジオ・スペース・フォト

約 80 名の同窓生有志でつくる合唱団“メサイアをうたう会”は、毎年 5 月末に学院の大講堂をお借りしてアーリーサマーコンサートを開催しています。今年はこの演奏会を、<震災で親をなくした子どもたちへの支援のためのチャリティーコンサート>とし、チケットの売り上げと演奏会の趣旨にご賛同くださった多くの方々からの献金を併せ、総額 100 万円を子どもたちへの長期にわたる支援を掲げる“あしなが育英会”と“桃･柿育英会”の 2 団体に寄付いたしました。皆様のご協力に感謝いたしますと共に、今後も会の活動を通して私たちに何ができるかを考えていきたいと思っております。

東日本大震災救済チャリティ「赤毛のアン募金」ご協力のお願い

震災で多くの方が幸せな日常生活を奪われました。何かせずにはいられない、そんな思いを皆さまも抱かれたことと存じます。私は赤毛のアン記念館・村岡花子文庫の活動を通して出会った仲間と共に、保護者を失った子どもたちへの支援に特化し、マシュウやマリラになってくださいとのメッセージを込めて「赤毛のアン募金」を立ち上げました。赤毛のアンの作者であるモンゴメリの遺族、プリンス・エドワード島州政府観光局、カナダ大使館からもご賛同を頂いております。確かな情報を集め、子どもたちの生活や教育のための資金として、地方自治体・支援団体にお届けします。

Anne of Green Gables™
Great East Japan Earthquake Charity Project

赤毛のアン記念館・村岡花子文庫主宰　村岡　恵理（1986 年高等部卒業）

受付期間　2011 年 4 月 11 日（月）から 10 月 10 日（月・祝）まで
お問い合わせ　赤毛のアン事務局 03（5640）4555
受付口座：ゆうちょ銀行　記号番号：00110-1-512588　名義：赤毛のアン募金
詳細は www.@anne-charity.jp をご覧ください。ご協力をお願い申し上げます。

被災地救済活動への後方支援 —張田牧師は被災地の教会を拠点に、他の牧師の方々と協力して救援、支援に努力しています—

鳥居坂教会牧師　東洋英和女学院理事・評議員　張田　眞

被災地の教会はどこも津波の到達点ぎりぎりに建てられており、泥水に襲われましたが建物は残っています。周囲は同じような状況で、それだけに、助けを必要とする人々に囲まれており、教会は国内外からボランティアを受け入れ、そのベースキャンプとなっています。高齢化が進む小さな教会が為すには負担が大き過ぎるようにも感じられます。東京にいる私のような牧師がなすべきことは被災地の教会のために祈り、そこで労する人々への後方支援です。英和の卒業生が中心となって活動しているグループからの献金と物資をお届けすることもできました。

この人に聞く……15

オランダと日本　影から光へ

一九七〇年高等部卒業　タンゲナ鈴木　由香里

たんげなすずき　ゆかり
東洋英和に在学中一年間アメリカに留学。上智大学外国語学部国際関係副専攻卒業。オランダに日本商社より出向。青山学院日本語教師養成講座修了。一九七七年結婚。以後オランダに住む。一九八〇—八七年フィリップス社で技術者の為の日本語教師。一九八八—九六年国立マーストリヒト大学外国語学部日本語学科講師。一九九六—二〇〇〇年英国在住。二〇〇〇年より「日蘭対話を推進する会」の世話人。ファルケンスヴァールド・オランダ改革派教会執事。

海外在住日本人とアイデンティティ

二〇一一年三月十一日、突然日本を襲った巨大地震と津波は、海外に住む者たちの目をインターネットテレビに釘付けにし、心を麻痺させてしまった。その後、感じた無力感と深い深い悲しみは、今までに経験したことの無いものだった。

このことを通して、自分を改めて日本人と意識した者が多くあった。災害の後、海外のメディアは競って日本人の秩序正しさと助け合いの精神を絶賛した。誇らしく思う日本人の自分がそこにいた。

災害のニュースが流れると、電話が鳴り出した。メールやSMS（ショートメッセージサービス）、カードも次々届いた。町に出れば、行く先々で人々が日本の家族の安否を尋ねてくれた。これは、私だけの経験ではなく、海外在住日本人の誰もが経験したことだ。

オランダの小さな村で

日本の犠牲者のために追悼会を開こう、と教会の友達が言い出したとき、え、何でオランダでオランダ人が、と自分の耳を疑った。忙しいプロの音楽家や混声合唱団がその追悼会で演奏してくれると聞いたときには、涙があふれた。どうして、みんな、地球の反対側の人たちのために、こんなにやさしいのだろう。これは一体何なのだろう？

そんなことを考えていたとき、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」と言うマタイによる福音書七章十二節を思い出した。オランダ人が周りの日本人に声をかけ、家族の安否を尋ね、犠牲者のために何かしようと考えさせた原動力がここにあると感じた。このオランダ人たちの暖かな支援は、とりもなおさず現地に住む私たちへの支援でもあった。画像の前でただただ鳴咽していた者たちを立ち上がらせ、自分たちも何かしたい、という想いを共有させてくれたのだった。日本では、絆こそ日本の財産だといわれているようだが、決して日本だけの財産ではない。

ファルケンスヴァールド（人口約三万人）という小さな村の教会に、三〇〇人ほどの人たちが集まり、東日本大震災の犠牲者のために、追悼音楽会が開かれた。会場に置かれた籠には2,723.20ユーロ（317,252円）が集まった。

戦争の傷跡

三〇年ほど前、まだオランダに来たばかりの頃、スーパーマーケットで日本人かと聞かれたことがあった。にっこり笑って「はい」と答えたとたん、戦時中の日本軍俘虜収容所でのできごとや、いかに日本兵が残酷だったかを、上品そうなその婦人が語り始めた。ある日本人の友人は、テニスクラブで日本兵につけられた傷跡を見せつけられたと言った。日本人が隣に越して来るからと、ほかの所に引っ越して行った人もいたほどだ。そのたびに、自分たちの無知を嘆いた。

こんな背景があり、私は日蘭双方がより理解しあえるための努力を重ねてきた。特にこの十数年、過去に日本人から受けた傷を引きずっている人たちに、オランダ在住の日本人と接する場を、仲間たちと提供している。また、戦時中インドネシアでくりひろげられた日蘭の歴史を知ってほしいと、昨年日本軍俘虜収容所のことが書かれた本『母への賛歌』を翻訳出版した。

そういった中で、今回の経験は、私にとってオランダでの三〇数年の歳月を深く思わされるものであった。たとえ大震災自体がいかに破壊的で非情なものであったにしても、オランダ人の思いやりの深さ、絆（御言葉）を大切にする暖かな心を、心行くまで感じさせてくれたからだ。

オランダの小さな村での東日本大震災犠牲者のための追悼コンサート

2010年6月『母への賛歌―日本軍抑留所を生き延びた家族のものがたり―』（いのちのことば社）出版記念講演会。通訳をする筆者（右）

東洋英和幼稚園

わたしたちにできること

東日本大震災後、幼い子どもたちにも地震の揺れに敏感になったり、警報の音に反応するなどの姿が見られました。わたしたちにできることは何か？幼稚園ならではの支援を探し、被災地の方々のことを覚えて祈りつつ、子どもたちとご家族の方々と協力をして活動を行っています。

第一弾として、各ご家庭に子ども用の春・夏物の洋服と絵本を集めようと呼びかけました。「大好きな絵本だから」「姉妹で持っているから一冊あげよう」「着ようと思っていた服だけれど小さくなってしまったから」など、思いが詰まった物資が幼稚園に持ち寄られました。その数は段ボール十箱分になりました。それらを、いわき市でレンタルおもちゃの活動をなさっている〝とい・きゃらばん〟というNPO法人に送りました。

第二弾は、短くなったローソクを集め、年長組の子どもたちとかなづちで砕き、湯煎にかけて溶かし、新たなローソクへと再利用するローソク作りを行いました。それらをラッピングしてローソク献金をお母様方にお願いしました。

第三弾は、クッキー作りです。クッキーの生地を作ったり、星やハートやチューリップの型抜きをしたり、オーブンの前で焦げないように焼き上がりを見たり……幼稚園中においしそうないい匂いが漂いました。大きいの、小さいの、プレーンとココア味、いろいろ混ぜて袋に詰め、今回はクッキー献金となりました。ローソクの献金と合わせて、物資の送り先と同じ〝とい・きゃらばん〟へ送りました。

また、母の会では六月末に行われた「いちょうの木献金セール」の売上金を全て義援金として寄付しました。『隣人を自分のように愛しなさい』という御言葉に向かって、これからも被災地の方に思いを寄せ、コツコツと自分たちでできる活動を続けていきたいと思います。

大学付属 かえで幼稚園

信頼の関係を大きな備えとして歩みたい

東日本大震災後、防災について見直しの機会を与えられています。有事に、落ち着いて、できるだけ冷静に判断し、安全に動けるために、正確な情報を知ることと、具体的な備えは必要です。

それにつけても、当然のことではありますが、『子どもが大人を信頼して、安心して大人のことばに聞き従う』関係ができていることの大切さを思わされています。この関係は、まずは家庭の中で培われていくものでしょう。そして、その延長線上に私たち保育者との関係が結ばれていきます。私たち保育者には、神さまから託されている幼子の大切ないのちを守る責任があります。万が一の大災害の時、「あなたたちのことを、出来得る限り守ります。だから、落ち着いて、安心して私に従って来なさい」と示し、子どもを不安と危険から守れるよう、日頃から心を通わす関係を重ねていきたいと思います。

さて、安心と安全を前提にし、なお保障し続けたいことは『幼子の幸せな日常・喜んで遊び、生活する毎日』です。このたびの大震災と、その後に続く放射能の影響を考えますと、通常の保育を続けられるかどうか迷うところでした。教師会で幾度も検討し、祈って決断してきたことは、「私たちは、外部からの情報に敏感になりながら、保育者が必要数備えられる以上は、園を開き、来られる子どもを迎え、通常保育をしよう」ということです（ほとんどの子どもたちが園から近距離の地域に住んでいるため、有事の際には、短時間での保護者のお迎えが可能ということも大きな理由です）。

不安を感じていらっしゃる保護者に向けては、必要に応じて園の方針を伝え、理解していただくようにしてまいりましたし、今後もそのことに努めたいと思います。その上でどうするかは、各ご家庭の考えを尊重します。

子どもとも、保護者とも、信頼の関係をもたせていただき、喜びも困難も、祈りながら受け止め、進んでいきたいと願うものです。

尚、かえで幼稚園では、被災された方を覚えての祈りと献金を、今後も継続的に捧げたいと考えています。

東日本大震災　小学部の一日

小学部教頭　村松　時子

　午後二時四六分、今まで体験したことのない揺れは感じたものの、子どもたちに怪我はなく、その後の大きな余震も含め、上手に机の下などに避難ができました。一年生はインフルエンザによる学年閉鎖中で在宅中、三年生以上は在校中でした。しかし、二年生の一部が下校を始めていました。十九名の児童が数人、あるいは一人で地震に遭ってしまいました。怖い思い、不安な思いがいっぱいだったと思います。それぞれ時間はかかりましたが、居合わせた保護者や親切な方によって、または自分で公衆電話を使い、保護者との連絡がとれて無事帰宅することができました。そのまま自力で帰った児童たちもいました。

　在校の二年生と三年生以上の児童は保護者による引き取りとなりました。電車が止まってしまったため、大混乱の街を徒歩で何時間もかけて帰宅したという話や徒歩帰宅訓練が役立ったという話も後から聞きました。夕方五時の時点では、在校児童約一六〇名、夜九時の時点で四三名の児童、教職員、帰宅手段のない保護者の方々が校内に泊まりました。夜中まで引き取りが続いたため、朝まで在校していた児童は一六名で、午前九時すぎには、児童全員が無事にそれぞれの保護者と帰ることができました。

　今回の経験をふまえ、小学部では今まで以上に安全対策を進めて参ります。

震災後　小学部にできること
～心のつながりを感じて～

小学部教諭　濱田　いずみ

　震災以前から東北の方々と小学部の児童は多くのつながりを持っていました。二〇一〇年九月の六年修学旅行の行き先も東北でしたし、給食で低学年が飲んでいる牛乳は岩手県から取り寄せています。小学部の児童がお世話になっている東北の方々が被災されたのです。何か私たちにもできることがないかと思いを募らせた六年教員の呼びかけで、震災から五日後の卒業式の日、お手紙を書いて送らせていただきました。気仙沼漁港、遠野ふるさと村、室根町の方々、ホテルやバス会社の方々、それから毎日の牛乳を送ってくださっている田野畑の方々などにです。そうしましたら、驚いたことに、困難な中にいらっしゃるはずの皆様から次々と子どもたちへのお返事をいただきました。

　四月四日に田野畑山地酪農牛乳の皆様からいただいたお手紙の一部を紹介させていただきます。ご丁寧にお返事をいただきましたので、抜粋してのご紹介です。

　今後も小学部では、被災された方々のためにできることがあれば、精一杯させていただけたらと思っております。七月九日（土）には、震災のためのチャリティーコンサートを催しました。

＊この記事に書かれている学年は、全て二〇一〇年度のものです。

ボランティア委員が、昇降口に立ち、義援金を集めました

オルガンコンサートにご来場くださった方で、義援金にご協力してくださった方には、かえでのしおりをプレゼントしました。全校児童が心を込めて作ったしおりです

田野畑山地酪農牛乳の方からの手紙　2011.4.4

濃厚でフレッシュな牛乳がみんな大好きです

…日々時間がない中、皆様のお気持ちを綴ってくださって、本当に嬉しかったです。温かくお育ちなことに、大変心温まり、胸が一杯になりました。そんな皆様方に（牛乳を）飲んで頂けていることに、感謝の気持ちで一杯です。

…牛舎で牛乳を搾る時は電気がないことから、手で絞りました。みんな大変な思いで絞りましたが、機械だと４本一度に絞れますので、電気と機械のありがたさが身にしみました。電気がないので、絞った牛乳は冷やせません。牛乳缶に入れて、なるべく早く避難所に持っていき、みなさんに飲んでいただきました。

…被災された方たちは家も流され、車も流され、ひどい人は家族も流されてしまいました。全ての財産と大切な家族を失って、茫然となさっているのです。目と目が合うだけで涙が出てしまいます。優しい言葉を掛けて差し上げたいと思っても、涙が先に出て、言葉になりません。とにかく、今は皆様のお力になれることがあれば、何でもやっていきたいと思っております。

…皆様の優しさが胸に大変響きました。感動しました。まだ６年生（もう卒業されましたが）ですが、優しさが人を救い、地域を救い、国を救うのだと思います。

　どうぞ益々お優しい人間に育ってください。私たちも皆さんへの感謝を胸に頑張る決心です。…ただ牛乳を売る・買う関係ではあり得ない心が生まれていることに、涙が出るほど有難く思っております。

3・11 その時、中高部では

高等部教頭　石澤　友康

地震発生当日の二〇一一年三月十一日(金)、校内では試験休み中のクラブ活動等で生徒が四一一名在校していました。首都圏の鉄道は全面運休状態となり、徒歩通学と引き取り可能な生徒はヘルメットを着用させて自宅との確認の上、帰宅させましたが、それ以外は校内に宿泊を余儀なくされました。幸いにも校内には多くの教職員が勤務していて、すぐに役割分担し組織を作り宿泊と引き取り体制を築き、一致団結して対応に当たりました。二八〇名の生徒は一九時に非常食や保存の水で夕食をとり、クラブごとに部屋割りをし、晩禱後に消灯しました。その間も夜通し引き取り対応と見回りを続け、夜を無事に乗り切りました。翌朝六時起床、礼拝後に朝食。交通機関も回復し帰宅と引き取りも順調に進み、一六時には最後の生徒を保護者に引き渡し、長い一日が終わりました。また当日、新宿御苑の茶室で行われていた英和茶会に参加していた高校二年生は都立新宿高校に、ロボットコンテスト選抜の高校二年生は慶應大学湘南藤沢キャンパスに宿泊となりましたが、こちらも引率共々全員無事でした。学校ではその間保護者へ緊急メールで時々刻々の状況を配信。その後ホームページにも今後の予定を載せ、担任から在校生宅へ電話で状況を聞くことなどを行い、自宅待機の三月を乗り切り、四月より無事に学校再開が果たせました。

校内に宿泊した生徒達は全員不平不満を言わず冷静に行動し、むしろ突然の「お泊り会」を楽しんでいるかのようで、頼もしかったです。生徒達の落ち着きが非常事態を無事に乗り越えられた最大の要因でした。

集会室に集合し点呼と説明を受けました

食事は差し入れのチャーハンとシューマイをいただきました。美味しかったです

引き取り班の先生方が確認作業中です

対策本部を設け情報収集を行い、次々に対応を検討実施しました

中高部では普段の防災対策として以下のような体制をとっています。

①校内安全対策
- 校舎の充分な耐震性の確認
- 什器転倒防止完了
- ガラス飛散防止完了
- 火防煙対策完了
- 全生徒分教員分のヘルメット完備
- 緊急地震速報完備

②備蓄品の整備

今回の震災後、再び生徒教員3日分の食糧の確保を目指して構築中。防災毛布や保温アルミシート、簡易トイレや防災トイレ、タオル、生理用品、懐中電灯など避難生活必要品と発電機、投光器、揚水ポンプなどが整備済み。

③情報通信手段

「自然災害緊急メール」に全校生徒保護者および教職員のメールアドレスを登録。緊急時にメールを一斉配信するシステムを導入済み。学院ホームページ、防災伝言ダイヤル、ラジオの「学校安否情報」も併用。

大学　東日本大震災、緊急事態を越えて

—停電など学院各部の中で最も震災の影響が大きかった大学。その報告とともに在学生・卒業生達の支援活動を紹介します—

震災当日の大学の様子

人間科学部学部長　柳沢　昌義

3月11日、春休み中のため授業こそなかったが、卒業礼拝が行われ卒業式に着用するガウンの貸出日でもあった。そのため、4年生やクラブ活動の学生などが相当数在校していた。

大学での地震は最初緩やかに横揺れが数秒続き、その後大きな縦揺れに変わり、数秒して停電。携帯電話はつながらず、かろうじて数回に一度、メールのやり取りができた。何とか得られた情報は、震源は東北、停電は神奈川県全域で起きていること、そして鉄道の全面運休。

校舎内は停電のためやや薄暗く、防火用扉が自動的に作動して通路をふさいでいた。研究室は棚の上から物が少しばかり落ちた程度で、被害はさほどないようだった。

周辺の状況や駅の状況を確認するために校外へ出たが、信号機もすべて停電。お店も停電、電卓で精算が行われていた。十日市場駅はシャッターがしまり、足止めをされた人々で混乱していた。国道246号線は大渋滞で歩くスピードより遅いほどだった。

地震直後に十日市場駅へ向かった学生や教員が、断念して徒歩で校内に戻ってきていた。職員の誘導で9号館に学生を集めることにしたが、その後、5号館へ移動。すでに真っ暗であったが、ろうそくを灯して学生の名簿作成を行い、保護者からの連絡に備えることにした。

夜になると3月とはいえ非常に冷え込んだ。学生全員を中央館食堂に集め、暖をとることにした。しかし、灯油も少なく、空気の悪化も懸念され、あまりの寒さに換気もできないため、ストーブは最小限におさえられた。寒さと乾燥をしのぐためマスクを着用し、4年生の中には、せっかくの卒業式用のガウンを上からかぶる学生もいた。また、余震に備えて、ろうそくのまわりの学生には吹き消し係を決めさせた。

停電中の中央館食堂の様子

中央館には災害対策本部が設置され、学生の安全確保、連絡手段、明かり、暖房、水、食料の確保に奔走した。学生には備蓄していた水と乾パンが一人一つずつ配付された。しばらくして、買い出しに出た車が戻り、カップラーメンが配られた。しかし、お湯が少なく、まだ沸騰前のぬるま湯で食べる学生もいた。

午後10時半過ぎ、停電から回復。歓声が上がった。TVのスイッチを入れ、日本におきた惨状を映像で初めて知ることとなった。津波の映像に皆が衝撃を受けた。

TVはつけたまま、眠る学生のために電気を消した。ソファの数が限られていたため、ほとんどの学生は椅子に座ったまま寝た。実際は一睡もできなかったに違いない。体調を崩した学生も出たが、健康相談室の職員が残っていたのは幸いだった。深夜2時過ぎに、再び車で近くのコンビニまで買い出しに出た。しかし、何も手に入らず、遠く離れたコンビニでおにぎり、パン、スープ、チョコレートなどをやっと入手することができた。それでも足りず、4時頃再び買い出しに出た。

数名は保護者が車で迎えにきたが、残り大半の学生は大学で朝を迎えた。ようやくJRが運行開始した。運行状況や混雑状況を考慮しながら、シャトルバスを駅まで出すことに決めた。午前10時、最後のシャトルバスが出発。無事学生を送り出し、長い一日が終わった。

震災後の対応について

大学事務部長　雨宮　美和子

3月11日（金）震災当日は帰宅困難学生が約70名、10数名の教職員と共に学内に宿泊し翌日午前中に皆無事に帰宅した。翌月曜日、東北6県出身学生62名のリストを作成し、学生本人および保護者の安否確認を開始、最後の1名の無事を確認したのは3月22日（火）であった。3月13日（日）深夜、東電から通達が入り卒業式当日の3月17日（木）が計画停電実施日であることが判明。やむを得ず卒業式は中止としたが、計画停電との兼ね合いを見ながら3月26日（土）12時から規模を大幅に縮小した「卒業証書・学位記伝達式」を挙行した。

新年度の授業は、文科省からの授業時間数取扱い弾力化の通達もあり、盛夏に入るまえにできるだけ学事を終了させるべく、5月の連休も授業を行い、原則7月中旬に授業終了となるよう学事暦を変更、オリエンテーションや健康診断は計画停電に合わせて組み直して実施した。また1年生のオリエンテーション合宿は千葉・富浦で行う予定であったが、余震・原発事故等を考慮し「学内で1日」に変更した。学内の節電については震災直後からアクア・エクササイズ・センターの温水プール・ジャグジーを9月末まで運転休止、全学内の廊下・パブリックスペースの照明は50％減、空調や電気給湯器などの稼働も最小限に抑えて使用電力の削減に努めている。

卒業証書・学位記伝達式

2012年度大学入試について

東洋英和女学院大学では、学力を幅広く評価するために様々な入試形態を導入しています。

【院内推薦入試】

東洋英和女学院高等部在学生を対象とした入試です。書類審査、面接を総合的に評価して選考します。選考結果が優秀な方は院内スカラシップ生として合格となり、入学金を除く学費が2年間免除される特典が与えられます。

【同窓生子女枠特別推薦入試】

東洋英和女学院の大学、旧短期大学、中学部・高等部卒業生のご息女、お孫様、ご姉妹、もしくは在学生のご姉妹を対象とする入試で書類審査、面接を総合的に評価して選考します。

【公募制推薦入試】

本学で学ぶことを強く希望し、建学の精神や教育理念を十分に理解されている方を対象に志願者の資質、個性、学業以外の諸活動の成果、取得資格などを評価し、書類審査、小論文、面接を総合的に評価して選考します。

この他にスカラシップ特別入試、一般入試、一般入試（後期）、大学入試センター利用選抜等があります。

お問い合わせは大学入試広報課（045-922-5512）まで。

URL http://www.toyoeiwa.ac.jp　E-mail nyushi@toyoeiwa.ac.jp

＜在学生による募金活動＞想いをかたちに力に

国際社会学科国際コミュニケーション専攻 4年 飯沼 里可子

3月11日、地震がおきたその瞬間から、続々と被害や原発の状況が明らかとなり、中継放送で流れた津波に美しく手入れされた畑が飲み込まれていく様子、避難しようと走行中の車が逃げ道をなくし飲み込まれていく映像は一生忘れないでしょう。

この緊急事態への対応の迅速さ、冷静さは高く世界中で評価されています。留学先で知り合ったアメリカ、ヨーロッパ、アフリカ地域にいる多くの友人から安否の確認、叱咤激励のメッセージが寄せられ、様々なアーティストや国家規模で行われる迅速な支援にも心が強められました。

そのようななか、その惨事が起きた国に無事に居る自分はただ、被災地のために祈ることしか出来ないのか、何かやらなければと考えるようになりました。多くの義援金口座が開設されるなか、大学生の私は振り込むほどの金額は寄付できない、でも何かせずにはいられませんでした。大学生でも気負わずに支援に参加できる方法として、大学での募金活動を考え「震災孤児」へ寄付することを決めました。寄付先のNPO「幼い難民を考える会」は、親を亡くした小・中・高校生への学用品、制服代として支援する他、3歳から6歳までの子どもたち約1,000人を対象に「あおぞら保育」を実施する予定です。家族を失う悲しみと不安は計り知れませんが、その子どもたちがその現実を乗り越えながら、今まで通りの生活を送るために必要不可欠な支援だと考えました。

幼・小・中高と共に育った友人たちを含め約10人、大学の卒業証書・学位記伝達式の日に義援金募金協力を求め校内に立ちました。私たちがたった5時間立つだけで、約15万円ほどの義援金を集めることが出来、どれだけ多くの学生がなにか力になりたいと思っているのだと実感したと同時に、その想いを形として集め両親を失った子どもたちのための支援となる架け橋になれたのではないかと思います。まだ細い架け橋かもしれませんが、この橋をより太く、強いものにするために多くの学生により積極的に行動を起こして欲しいと思います。

震災から3ヶ月が経ち、被災地や節電などへの関心も少しずつ薄れてきているのが現状です。継続して行動を起こしていくことが早期復興へ大きな力となります。大学校内での義援金活動も継続して行っていき、募金への参加を通し学生に被災地を意識し続けていただくきっかけとなっていきたいと思います。

＜卒業生による募金活動＞隣人を自分のように愛しなさい

人間科学科保育子ども専攻 2010年度卒 堤 悠里奈

今回の地震を受け、日を追う毎に明らかになる現状に、心は苦しくもあり、悲しくもあり、何よりただならぬ現実を受け止めることが厳しい毎日が続きました。同時に、自分のやるべきことは何かを考えるようになりました。力になりたいという思い、その思いを形に変えることができれば、やがて被災者の方々にとって僅かながら支えになれると思いました。その時、私は自分と同じ思いを持っている人が、自分の周りにたくさんいることを確信していました。そのような人が行動できるきっかけになればと思い、3月16日義援金を集めるための口座を設置し、英和の中高の同級生、先輩や後輩、英和の大学の友人に呼びかけました。これが、今、私にできることでした。すると、友人の家族や、友人の友人、たくさんの方が協力をしてくれました。

本学の建学の精神である「隣人を自分のように愛しなさい」という御言葉は、私たち英和生の心にしっかりと根付いていると感じました。大切なのは金額ではないけれど、私たちの思いも乗せて、3月31日までに集まった約65万円を日本赤十字社に募金しました。今後も機会を設けて募金活動を行いたいと考えています。「愛のわざは小さくても神の御手がはたらいて悩みの多い世の人をあかるくきよくするでしょう」(讃美歌『ちいさなかごに』)

＜大学院修了生による現地での活動＞東日本大震災—医療NGO「AMDA」の活動に参加して—

大学院 国際協力研究科 2011年3月修了生 高岡 邦子(内科医)

筆者は、本格的にAMDAの国際医療協力に参加するために2008年12月に開業医を辞め、2009年4月に本大学院に入学した。医療のことしか知らないのでは国際協力は務まらないと考えたからである。奇しくも、3月19日の大学院修了式当日にAMDAから派遣されて岩手県大槌町に入った。大槌町は、唯一の県立大槌病院と5つの民間診療所が津波で流され、町長をはじめ幹部職員の半分が亡くなり、医療崩壊していた町である。

避難所の一つの県立大槌高校の保健室では、大槌病院の医師・看護師・薬剤師たちが一週間家族とも再会できずに懸命な診療を続けていた。我々が到着する2日前に電気・水道が復旧していた。すでに重症患者のトリアージ(治療の優先順位決定)や救急搬送は終わっていて、高血圧症・糖尿病などの慢性疾患の薬を津波で流された人々が、毎日200人近く救護所を受診していた。当初は、処方されていた薬の情報もなく医薬品も足りず一番苦労した時期である。

第3週に入ると、医薬品も一部を除いては潤沢に供給され、全国から日本医師会災害医療チーム(JMAT)が続々と到着した。メディア、県職員、個人ボランティアなども次々と訪れ、対応窓口が必要となったため筆者は、聴診器をしまい調整役に徹した。毎日5つのミーティングをこなし情報の共有を心がけた。各避難所のニーズを情報収集し、医療支援物資の振り分け、医療チームの役割分担など、ニーズに即した活動は大学院での学びがなければ成し得なかったと考える。また、AMDA医療チームは診療のみならず、各自がニーズを拾い上げ母子のためのプレイルームの設置、総合ビタミン剤の配布などさまざまなプログラムを実践し、「NGOの柔軟性」を実感することができた6週間であった。

行事報告 3月～5月

東洋英和幼稚園

●お別れ会　3月2日(水)
三歳・四歳児が卒園していく五歳児のためにゲームやショー、ベンガルカレーのおやつを準備して楽しい会を行いました。大工(木工)でお手紙ばさみを作り、プレゼントしました。

●第九七回保育証書授与式　3月11日(金)
四三名の子ども達が卒業しました。

●入園式　4月13日(水)
四四名の子ども達を迎えました。

●新入園母子歓迎会　4月27日(水)
お母様にハンドベルの演奏、布の絵本上演、おやつを手作りしていただき、五歳児からは、歌を聞かせてもらいました。

●歯磨き指導　5月26日(木)
歯科衛生士の岸玲子先生をお迎えして、親子で歯みがきの実習や講演を伺いました。

歯みがき指導―仕上げ磨きの実習―

大学付属 かえで幼稚園

●保育証書授与式　3月18日(金)
五六名の子どもたちが神さまの祝福のもと卒業しました。

●入園式　4月12日(火)
保護者と共に主の守りと導きを祈りました。

●イースター礼拝　4月25日(月)
保育時間内には在園児と共に、午後には卒業生と近隣の小中学生と共に、礼拝と卵探しをしました。

●ワークの日　5月14日(土)
今年度一回目のワーク。五歳児父子が、思いと力を合わせて、働く喜びを共有しました。

●4歳児園外保育　4月26日(火)

●5歳児園外保育　5月10日(火)

●3歳児ピクニック　5月19日(木)
美しい自然の中、楽しい交わりの時を過ごしました。

入園式―子どもたちにお祝いのことばを伝える村上学長―

小学部

●卒業式　3月16日(水)
震災の影響で感謝の会を取りやめ卒業式のみ行われましたが、心温まる良い式となりました。

●入学式　4月11日(月)
満開の桜に迎えられ、八〇名の可愛い新一年生が入学しました。

●イースター礼拝　4月27日(水)
中高部の髙橋貞二郎先生に説教をしていただきました。笑いあり、涙ありのお話は、私たちもイエス様と共に復活することが約束されている喜びを心に刻むことができました。

●春の遠足　4月28日(木)
低学年・高学年　新宿御苑
中学年　明治神宮

●運動会　5月21日(土)
お天気にも恵まれ、歓声と笑顔が溢れる素晴らしい一日となりました。

春の遠足

中高部

●高等部卒業式　3月28日(月)
震災の影響で延期しました。

●中学部入学式　4月7日(木)

●中1歓迎礼拝　4月19日(火)

●高三修養会（天城山荘）　5月9日(月)～11日(水)
講師に戸波義憲牧師（横浜菊名教会）をお迎えしました。テーマは3D。

●高二修学旅行（阿蘇・雲仙・長崎）　5月16日(月)～20日(金)
天気に恵まれ、長崎で平和について学びました。

●中1オリエンテーション
前期5月16日(月)～18日(水)
後期5月18日(水)～20日(金)
追分寮にて親睦を深めました。

●中3遠足　5月18日(水)
上野国立科学博物館または上野動物公園に行きました。

●高一・中2　校内プログラム
5月18日(水)

高等部卒業式

大学 大学院

〈大学〉

●卒業証書・学位記伝達式　3月26日(土)
三月一七日に予定されていた卒業式を変更し、簡素に行いました。記憶に残る式となりました。

●入学式　4月4日(月)

●1年生オリエンテーション　5月20日(金)
震災の影響により、学外での宿泊から学内での日帰りのプログラムに変更して行いました。学長講演の後、ゼミごとに討論・グループワークを行い交流を深めました。

〈大学院〉

●学位授与式（修士課程）　3月19日(土)

●入学式　4月2日(土)

1年生オリエンテーション

追悼の辞

東洋英和女学院 前大学学長 学院学事顧問 飽戸 弘

高木栄作人間科学部学部長が本年三月三十一日、突然、ご逝去されました。痛恨の限りですが、追悼の言葉を贈らせていただきます。

高木君、あなたとのお付き合いは三十年にもなるのですね。初めてお会いしたのは一九八二年、私が東大文学部助教授に就任した時でした。あなたは大学院生でしたね。一九八六年、辻村教授が退官され私が指導教官となり、それ以来、東大助手時代、東洋英和時代と、ずっと私の片腕となって助けてくれました。

高木君、あなたの生涯を一言で要約するならば「良き教師」であったと言えるでしょう。院生時代、助手時代と、あなたは自分の業績を挙げなければならない時期にも、いつも学生諸君の卒論や修論の手伝いに追われていましたね。英和時代も、自分のことは常に二の次で、心から学生を愛し、そして大学のために、しばしば深夜までも献身的に働かれました。

いちばん嬉しかったことは、あなたが亡くなる直前に、あなたにお会いできた時のことでした。奥様から、あなたがガンの手術のため最期に入院した時、「聖書を持って来てくれ」と言われた、と伺いました。奥様はなにか不安に思いましたが、聖書を持って行ったところ、むさぼるように聖書を読んでいた、とのことでした。

わたしが何度願っても伝えられなかった福音を、神様は病を通して高木君に呼びかけて下さり、救って下さったということが、確信できました。これほど嬉しいことはありませんでした。

高木君、今は「死もなく、苦しみ、悲しみもない」、天のみ国で、主イエスと共に憩っていることでしょう。私たちが、一足遅れて到着する日を、安心して待っていて下さい。

高木栄作先生

一九八一年、東京大学文学部卒。一九八八年、東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得満期退学。直ちに、東京大学文学部助手（社会心理学研究室）に就任。一九九〇年、東洋英和女学院大学人文学部講師、助教授を経て、二〇〇一年、同 人間科学部教授、二〇〇八年、同 人間科学部学部長に就任。学部長在任中の二〇一一年三月三十一日、永眠。

故 高木栄作先生 追悼礼拝

故高木栄作教授の追悼礼拝が七月十三日、十二時二〇分より本学礼拝堂にて行われました。吉岡良昌大学宗教主任司式のもと、讃美歌三一二番「いつくしみふかき」斉唱、ヘブライ人への手紙十一章八～十六節朗読、一同祈禱の後、村上陽一郎学長の式辞、飽戸弘前学長、岡本浩一人間科学部教授、ゼミ生だった四年生の秋田梓さん、佐藤紘菜さん、九五年度卒業生の松金めぐみさんより追悼の言葉がありました。学院からは、池田守男理事長・院長、吾妻國年副院長が参集されたほか、多くの大学教職員、法人職員、学生が参会しました。村上学長からは、病院から「学長ご就任時の全身全霊でお支えしますとのお約束が果たせなくなりました」とのファックスが寄せられたこと、飽戸前学長からは、大学院生・助手時代からの故人のあたたかな人柄が披歴され、岡本は、三〇余年の故人との深い交流と学問的な人柄についてお話ししました。

あらためて、高木教授の早すぎた帰天をそれぞれにかみしめたひとときとなりました。

人間科学部教授 岡本浩一

史料室レター ④ 関東大震災のときの東洋英和

1923年9月1日、関東を襲った大震災では、東洋英和の生徒から4名の犠牲者が出ましたが、頑丈だった校舎には大きな被害はありませんでした。当日はまだ夏休み中で、学校を守った寄宿舎舎監の加茂令子氏が当時の様子を綴った記録が『東洋英和女学校五十年史』に掲載されています。

10月1日の開校日には教員会議が開かれ、罹災した学校に援助の手を差し伸べることが決まりました。そこで①学生のほとんどが寄宿生であった幼稚園師範科を一時長野市に移し、寄宿舎には津田塾と聖経女学校から各20名を受け入れ、②10月中は午後の授業を休講として被災者のための裁縫などをし、③午後の教室を本所深川で罹災した中村高等女学校（現 中村学園）に半年間貸与しました。

『中村学園八十年史』によると、校舎が全焼したため教室探しに奔走しましたが、打診した公立・私立の諸学校からは法外な教室賃貸料を要求されて途方に暮れていたところ、東洋英和がただ一校、無料で教室を開放してくれた、とあります。

一時期校内は大混雑し、英和内外では幼稚園師範科は都落ちか？との噂もたちましたが、このとき同じ校舎で過ごした中村高等女学校の方がたには、ブラックモア校長のお話を聞く機会もあって英和の「奉仕」のこころがおのずと伝わりました。

今回の大震災に際し、私たちは困っている方たちに手を差し伸べているでしょうか。

聖書の言葉

…主はこう言われる。
私は建てたものを破壊し、植えたものを抜く。全世界をこのようにする。
あなたは自分に何か大きなことを期待しているのか。
そのような期待を抱いてはならない。…

エレミヤ書　四五章一節～五節

東日本大震災の惨禍と悲劇は、人々をして地を呪い天を恨む（神モ仏モ無イ）の思いに駆り立てると言っても過言ではないでしょう。その場合、安易に現世の御利益や幸福主義を説く宗教や哲学は沈黙するしかありません。しかし途方もなく過酷・無慈悲な事態の中で最後の拠り所を欠くなら、人間は偶然と虚無の感情に圧倒されて、精神の危機に直面します。

紀元前五八六年、バビロンの王ネブカドネザルの大軍によって、聖都エルサレムが攻略・破壊された。神殿と王宮と民の家々もすべて焼き払われ、無量の犠牲の血が流され、同胞一万数千人がバビロン捕囚となり、国家は滅亡した。その時預言者の書記バルクは絶望し、エレミヤの足もとに倒れ伏した。上掲の聖句は、その彼にエレミヤが告げた言葉です。「神が存在する。それで十分ではないか。」ナチスの弾圧下、生死のはざまを生きたK・ヤスパースはこのように解釈しました。V・フランクルも『夜と霧』の終章で同じ告白をしました。

他方、この度の大震災の惨禍において、私達は数々の人間性の内奥の真実に触れたのです。商家である自宅の壊滅現場に母親と立ちつくす青年に、災害支援の災害招集命令書が届いた。彼は即応予備自衛官だった。テレビ記者が問うと、「私はこの日のために訓練を受け、生きてきた。もし行かなかったならば二〇年三〇年後にきっと後悔するでしょう。」この人生と世界における苦難と試練は、創造主がすべての人間の魂に与えてくださった良心と善意の輝きと成長のための摂理的な機会なのではないでしょうか。

副院長・牧師　吾妻　國年

英和探訪⑮ 警備室（中高部）

セキュリティの上をいくサービスを！ 警備室を訪ねました

中高部の一階にある警備室。中に入ると大きなモニターに絶え間なく各所の室外映像が映し出されています。「死角がないようにカメラが設置されています。侵入者を感知すると、その画像が大きくなって知らせます。自動的に録画も始まります」と、二幸産業株式会社の関口さんがお話しくださいました。校内にはセンサーも設置してあり、夜間に異変があった時などすぐに警報が出る仕組みもあります。英和の警備システムはほかの学校に比べてもかなり優れているものだそうです。警備の方々は現在総勢十二名。二四時間三六五日、夜も宿直をしながら六本木校地を交代で警備しています。

三月十一日の震災の時には火災や防水槽の不具合、ガラスの破損、家具の倒壊やエレベーターの停止などはないか点検を行い、夜中じゅう保護者の方々の迎えの車を待つため門を開けて警備をしてくださいました。

六本木という土地柄から様々なご苦労もあるようですが、子ども達や生徒が挨拶したり話しかけてくれる時が、常に緊張を強いられているお仕事の中でほっとする時間です。穏やかなお人柄の方ばかりの警備員の皆様、「セキュリティだけでなく『究極のサービス産業』という自覚を持って仕事に臨んでいます」というお言葉の通り、いつも気持ち良く英和生の生活を見守っていてくださいます。

警備室にはたくさんのモニターが並んでいます

中高部の通用門にて。登下校の時も見守ってくださいます

警備員さんが六本木校地の各所で安全を支えています

新後援会会長挨拶

大切な絆

平成八年の長女を皮切りに三人の娘を幼稚園より現在までお育て頂いているのに加え、私自身も十一年前より後援会副会長のお役を賜り、親子揃って東洋英和に成長させて頂いた十五年が私と学院とのご縁でございます。

この度学院からのご推薦と役員会でのご承認を頂き後援会会長のお役を仰せつかる事になりました。昭和四年に創設された歴史と伝統のある後援会の会長と言う大役には甚だ未熟な若輩者ではございますが、池田守男理事長・院長を始めとする学院関係各位並びに後援会会員の皆様のご指導を頂き、全力でご奉仕させて頂く所存でございます、何卒一層のご協力を心からお願い申し上げる次第です。

さて、八十二年前に学院の校地校舎の拡張を目的に創設された後援会は、時代の変遷に伴い富田元会長、横山前会長が先頭に立ちその目的を「楓基金」や「本部・大学院棟建築助成」など教育上必要な事項に対する後援へと広げると共に、総会・懇談会と言った会員間交流や小学部父の会・父親有志の会等の各種奉仕活動、「東洋英和楓の会」への後援も積極的に行う進化を進めてまいりました。これらの活動の根底には学院と家庭の間の強い信頼関係の上に立った相互協力が有った事はご存知の通りです。娘達が学院生活で培った「友との絆」「師との絆」を人生の大切な宝物とする様に「学院と家庭の絆」を活動の中心に置く後援会活動が、この先も英和の建学精神の伝承と魅力ある学院作りの一助となる事を願い就任のご挨拶とさせて頂きます。

後援会会長　金子　栄一

前後援会会長挨拶

退任によせて

六年間の在任中、ご指導ご支援を賜りました、池田先生、吾妻先生、学院関係各位並びに後援会の皆様に感謝し、心より御礼申し上げます。

学院とのご縁は二十一年前に長女が幼稚園に入園させて頂いて以来で、三人の娘がお世話になりました。私ども家族にとってこの歳月は、正に東洋英和と共にありました。

幼稚園から大学までの各部に共通するのは建学の精神である「敬神奉仕」が息づく素晴らしい教育の実践です。それは偏に学院の皆様の永年に亘るご労苦の賜物であると存じます。

後援会では、教職員の皆様と私ども父兄が親しく交わり忌憚のない意見交換をする機会を頂きました。

お父様方の奉仕活動は野尻や合唱を始め幅広く充実し、学院との絆がしっかり築かれています。

各部の入学式、卒業式では、数え切れない感動の涙と笑顔に接し、喜びを共にさせて頂きました。

また「東洋英和楓の会」が創設され、広く学院をサポートする組織として歩み始めました。これにより、お嬢様のご卒業後も保護者の皆様が学院との関係を継続できるようになりました。

このように思い出は尽きませんが、後援会会長として振り返りますと、反省する事ばかりで汗顔の至りです。

幸いにも、新会長の金子栄一氏は役員経験が長く指導力にあふれた方ですので、今後の後援会は益々充実されるものと確信しております。

学院の飛躍とご発展をお祈りし、重ねて心より御礼申し上げます。

前後援会会長　横山　巖

後援会総会・役員会　七月一日（金）

二〇一一年度後援会総会・役員会がANAインターコンチネンタルホテル東京にて、開催されました。後援会総会は、年に一度各部の後援会役員や保護者の皆様が教職員とともに一堂に会する機会です。総会出席者数は二七三名でした。

総会に先立ち役員会が行われ、①新役員の承認と紹介 ②退任・新任の常任役員の承認と挨拶 ③二〇一〇年度決算報告及び二〇一一年度予算案の審議などが行われ、すべて承認されました。

総会では池田守男理事長・院長の挨拶の後、常任役員を退任される横山巖氏、石川栄氏へ学院より感謝状の授与がありました。そして、各部代表者の先生方より現状報告がありました。総会終了後の懇親会では後援会会員同士が交流し、教職員の方々もまじえ、なごやかな歓談の時を持ちました。

後援会常任役員

会長	金子栄一	（継続）
	横山　巖	（退任）
副会長	小林　宏	（継続）
	石川　栄	（退任）
	小泉光人	（継続）
	櫻井　恵	（継続）
	小森秀人	（新任）
	若井勝廣	（新任）
会計監事	櫟本健夫	（継続）

英和の植物通信
～目を近づければ楽しさ無限～ No.25

絵・文・写真：中池 敏之
（大学非常勤講師：博物館概論等担当）

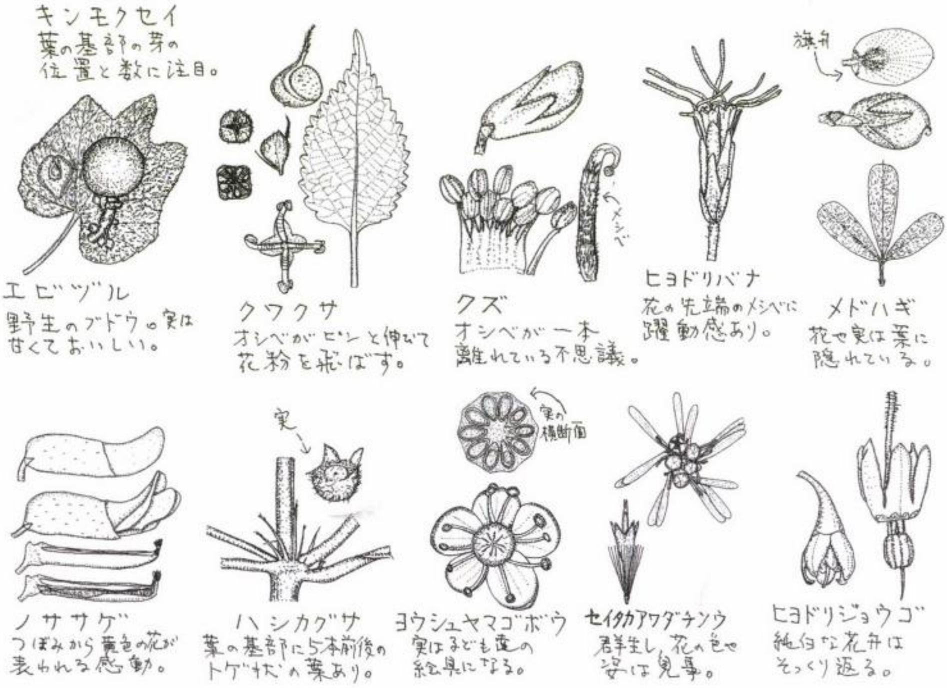
キンモクセイ（横浜キャンパス）

キンモクセイ（金木犀）

秋、この花は甘い香りをあたりに放ちます。できれば、その香りがどこから来ているのか、探したい。花は小さいが、枝にはたくさんの花を付けるので、遠くからでも橙色のまとまりを認識することができるでしょう。

不思議なことに葉の基部には芽が数個（線画参照）あります。一つ以外は予備のためです。なんとも用心深く計画的です。日本に植栽されている木は、ほとんどが雄花のため、実を見ることがありません。

現代人は自然の香りにうといと言われていますが、かつての子ども達は、この花を集めて水に入れ、香水作りをして遊んだものです。楽しい遊びです。



東洋英和楓の会　主催

日本舞踊公演のお知らせ

西川流十世宗家であり、人間国宝の西川扇藏（せんぞう）氏が、本会の秋の催しに「外記猿（げきざる）」を踊ってくださることになりました。他の立方や演奏家も卒業生であり、初めて日本舞踊を鑑賞する方も楽しめるよう解説を織り交ぜた、英和ならではの公演となります。是非ご鑑賞ください。

- ●日時　2011年10月29日（土）14：00～
- ●場所　中高部　新マーガレット・クレイグ記念講堂
- ●チケット　2,000円
- ●出演者　西川扇藏（人間国宝）　中村梅彌
  西川祐子　花柳かなで
  演奏：長唄　今藤長美弥
  東音　越智義乃 ほか

※チケット購入方法などの詳細はKAEDE Magazine Vol.02をご覧ください。

東洋英和女学院法人事務局　楓の会室
TEL：03－3583－3354
メールアドレス：kaedenokai@toyoeiwa.ac.jp

東洋英和女学院学院報　楓園　第65号

発行日：2011年9月7日
編　集：広報委員会
発　行：学校法人 東洋英和女学院
東京都港区六本木 5-14-40
TEL 03－3583－3325
メールアドレス
koho@toyoeiwa.ac.jp
ホームページアドレス
http://www.toyoeiwa.ac.jp

同窓会より

同窓会総会　六月四日（土）

梅雨の晴れ間の清々しい一日、各部同窓会が午前中にそれぞれの総会を持ち、午後からは会場を新マーガレット・クレイグ記念講堂に移して六つの部会からなる東洋英和女学院同窓会の総会が開かれました。

礼拝ではマルコによる福音書の御言葉に「敬神奉仕」の典拠を尋ね、祈りを合わせました。続く議事では、会長挨拶にて変化への対応が新年度の課題としてあげられ、会計に関するご質問やご意見も会員から出されました。卒業生が毎年出て会員が増えて行く会、それを期待できない会、事情は様々違う中で、思いを共有し力を合わせる大切さが示されました。

今年は初めて本学学長の村上陽一郎先生を総会にお迎えする事ができました。是非先生のチェロ演奏を！とのお声を聞く中、講演も伺いたいと大変欲張りなお願いを先生は快くお聞き入れ下さいました。

「女性と科学」と題しての講演は、大学院での講義を受けているかの錯覚に。そして舞台袖からチェロを持って再び登場された先生は、E・ブロッホの「祈り」を静かに弾き始められました。東日本大震災の前に決められた曲目でしたが、この時期に最も相応しいものとなりました。二百名を超えた出席者の万雷の拍手と笑顔が先生への深い感謝を物語っていました。

そして最後は池田守男理事長・院長に「東洋英和の現状と将来」とのテーマでご挨拶を頂きました。建学の精神に立ち返って外へと発信できる同窓会にと励ましを頂き、また再開発についても地域全体が良い環境を目指した上で進められるよう尽力したいと伺う事ができました。

村上学長によるチェロの演奏